

実習報告（学校変革基盤実習）

特別支援学校における基礎的環境整備と合理的配慮の現状と課題について

香月 真紀子（子ども支援探究コース特別支援教育系：現職教員）

【探究実習のテーマと設定の理由】

○探究実習のテーマ

肢体不自由特別支援学校における個別の教育支援計画の作成・活用についての現状と課題

○テーマ設定の理由

特別支援学校の個別の教育支援計画は、障害のある子ども一人一人のニーズを正確に把握し、適切に対応していくという考えの下、長期的な視点で乳幼児から学校卒業までを通じて一貫した確かな教育的支援を行うことを意図して作成している。令和2年度より、B県内全ての特別支援学校で個別の教育支援計画の様式が統一された。本来個別の教育支援計画は、作成することよりも、活用することが大切である。支援にどのように役立てるかという意識が重要であり、児童生徒にとって必要な支援が共有されるツールとして必要不可欠なものであると考える。しかし、現任校においては作成に多くの時間を費やしたり、結果的に効果的なものが作成できていなかったりという課題がある。

また、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が平成28年4月に施行され、特別支援学校においては、合意形成された児童生徒の合理的配慮の内容を個別の教育支援計画に位置付け、個別の教育計画に活かしていくことが求められている。一方で合理的配慮をどう捉えればよいのか現場では課題になっていたり、現在必要な合理的配慮は何か、何を優先して提供するかなど、児童生徒一人一人の合理的配慮について共通理解を図ることが難しかったりする。

そのような現状から個別の教育支援計画に明記する合理的配慮ばかりに意識が向き、基礎的環境整備について考えることがなかった。しかし、共通の環境として整備される基礎的環境整備を土台にして個別に提供されるのが合理的配慮であるため、基礎的環境整備を明確にし、共通理解しないまま合理的配慮を検討することはあり得ないのではないかと考え、特別支援学校における基礎的環境整備と何なのか、基礎的環境整備と合理的配慮の関係性について捉え直してみたいと考えている。

今回の探究実習においては、肢体不自由特別支援学校における基礎的環境整備と合理的配慮の現状について学んでいきたい。また、様式が統一されて2年目のA特別支援学校における個別の教育支援計画の作成や活用の現状について知るとともに学校の工夫についても探してみたいと考えている。A特別支援学校における基礎的環境整備や合理的配慮の現状について学ぶことによって、今後の研究へ活かすことができる学びが得られるのではないかと考え、このテーマを設定した。

【探究実習の研究目標】

- （1）肢体不自由特別支援学校における基礎的環境整備や合理的配慮の現状について知る。
- （2）個別の教育支援計画等の作成・活用における現状と課題について知る。
- （3）個別の教育支援計画等の作成・活用における工夫について探る。

【探究実習の概要】

実習校名称	A特別支援学校
実習期間	2021年8月25日～2021年9月22日（計20日間） ・高等部 8月25日～9月1日（計6日間）

	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部 9月2日～9月10日（計7日間） ・中学部 9月13日～9月22日（計7日間）
実習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・A特別支援学校の概要について ・A特別支援学校の現状について ・カリキュラムマネジメントについて ・自立活動について ・知的障害のある児童生徒の教科指導について ・進路指導について ・養護教諭の役割，災害時対応，感染症対策の徹底 ・栄養教諭の役割 ・食に関する指導と個に応じた給食の提供 ・情報セキュリティについて ・校内研究の取り組み ・地域支援の現状と課題 ・医療的ケアの現状 ・医療的ケアコーディネーターの役割 ・ICT利活用と具体的な事例 ・訪問教育について（授業見学を含む） ・授業参観 ・児童生徒の学習活動の補助 ・児童生徒の食事補助

【探究実習の成果と課題】

○成果

探究実習を通して，A特別支援学校における基礎的環境整備と合理的配慮の現状や個別の教育支援計画の作成・活用について知ることができた。同じ特別支援学校であっても，基礎的環境整備の状況が障害種に応じて異なることが分かった。A特別支援学校における基礎的環境整備は，肢体不自由児が安全に生活できるようにスロープの設置，校舎内には段差が無く，廊下の広さが十分に確保されているため，車いすでの移動が可能であった。廊下の壁には2つの高さの手すりを設置し，児童が自分に合った手すりに掴まって安全に移動をしていた。また，教室やトイレの空間の広さ，学習しやすい机等，物理的な環境整備が細やかになされていた。さらに支援員の配置や児童生徒への丁寧な言葉掛け，感染症対策の徹底，形態食の対応についても整えられていた。参観のなかで，形態食の対応や姿勢づくり等がA特別支援学校における基礎的環境整備なのか，合理的配慮なのか整理しにくかった。ただ，A特別支援学校では物理的な環境を整備するだけではなく，児童生徒への丁寧な関わり方も重要な基礎的環境整備であることが分かった。個別の教育支援計画に合理的配慮を明記することになってはいるが，合理的配慮と学習上の手だてとの違いがよくわからないという難しさがあることも知った。また，小学部，中学部，高等部の全学部で実習し，発達段階に応じた指導，児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた指導が行われていることを参観することができ，個別の教育支援計画において，めざしたい自立の姿の視点として重要な気付きを得ることができた。

○課題

児童生徒一人一人の合理的配慮は個別の教育支援計画に明記されているが，基礎的環境整備は明記されておらず，職員間では暗黙知になっているようだ。全ての児童生徒が安全に生活する，安心して学べる学校づくりの土台としての基礎的環境整備は共通理解を図る上では明文化することも必要なのではないかと感じた。B県内の全ての特別支援学校において様式が統一されたが，作成した個別の教育支援計画をどのように活用していくのかは各学校に任されており，新たな課題として解決策を検討しなければならない。個別の教育支援計画を作成する目的で開いている支援会議についても，活用の視点を踏まえた支援会議の在り方について考えていかなければならないと再認識した。

【引用文献】

全国特別支援教育推進連盟（2019）.「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成と活用 ジアース教育新社